



女神なんて
お断りですっ。8

紫南
Shinan

RB

レジーナ文庫



みこ
神子

謎の組織
『神の王国』の宗主。
人族による世界の統一を
目指しているが——？

ローズ

公爵令嬢。
女神サティアの
生まれ変わり
を自称している。

ラキア

ティアが育てた
ハイパーメイド。
家事から戦闘まで
なんでもこなす。

マートウファル

竜人族の男性。
かつてサティアの母である
マティアスやシェリスたちと
パーティを組んでいた。

レイナルート

フリーデル王国の王太子。
窮地に陥った時、弟王子と
居場所を入れ替えるための
魔導具を身につけている。
ヒュリアと婚約中。

ヒュリア

隣国ウイストの王女。
『神の王国』に
蝕まれつつある
自国を心配している。

シェリス

ハイエルフのギルドマスター。
前世からティアを知っており、
彼女を溺愛している
「自称婚約者」。

フラム

ティアと誓約している
ドラゴンの子ども。
甘えん坊な性格。

ルクス

ティアの専属護衛。
『未来の夫候補』として
ティアに相応しい男に
なるべく日々
鍛錬を重ねている。

ティア

10歳の伯爵令嬢。
かつてはサティアという
王女だったが、
革命を起こして亡くなり、
再び同じ世界に転生した。
転生時に得た『女神の力』を
フル活用し、冒険者として
活動中。

マティ

伝説の魔獣といわれる
ディストリアの子ども。
ティアの良き相棒でもある。

目次

女神なんてお断りですっ。
8

7

書き下ろし番外編

女神が祝福する明日へ

365

女神なんてお断りですつ。
8

第一章 女神の国防計画

暗い闇の中に落ちていく感覚を覚えて、どれだけの年月が経っただろう。天使として生まれたジェルバが地上に降りたのは、全て神のためだった。弱くて命も短い人族が、強靱で長命な他の種族と共存できるようにと、神は人族に七つの『神具』を与えた。それらは七つの属性に分かれている。

火……ゴージェン（浄化）の【神焰】。あらゆるものを焼き尽くし、悪しきものを浄化する。
水……シンスール（癒やし）の【神器】。あらゆる薬を生み出す。

風……ダシラス（武闘）の【神旋】。武闘の才を与える。

土……ラプーシユ（守護）の【神環】。守護する場所を結界で守る。

光……イズリス（楽園）の【神玉】。土地を潤し、失われた植物も芽吹かせる。

闇……セラヴィータ（干渉）の【神笛】。荒ぶる心を静め、思いに干渉する。

神……バトウール（記憶）の【神鏡】。世界の記憶から読み取られた者を映し出す。

けれど、これらの『神具』は長い年月の間に正しい力を失い、あり方を変えてしまったのだ。

それによって人々は傲慢になり、愚かな行動を起こすようになった。三柱の神々は『神具』による争いに心を痛めている。

回収すべきだとジェルバは思った。天使である自分がやらなくてはと思い、地上へ降りたのだ。

そのことを、なぜだかずっと忘れていた。だがこの数ヶ月、たびたび夢を見るのだ。その日、聞こえてきたのは、ここ何百年と思ひ出すことのない愛しい人の声だった。

「ねえ、天使様。そんなに急いでどうするの？ 時には翼を休めることも必要だと思っわ」
ハイヒューマンの里長であるルーフェニアが、優しく微笑みかけてくる。

赤い髪と瞳。精霊の声を聞くことができ、高い魔力と身体能力を持つ。それが神に愛されたハイヒューマンという種族だった。

「……私のことは気にしないでいい……」

ジェルバが邪険にしても、ルーフェニアは微笑みを絶やすことがない。そして、木にもたれかかることしかできないほど傷付き、疲れ果てたジェルバを癒やそうとしてくれた。

更には森の魔獣からジェルバを守るように、彼女の家族も近くに控えてくれている。それほど気にかけてもらっても、地上に生きる者というだけでジェルバに不信感を抱かせた。

「天使様は、この『神具』をお探しだったのでしよう?」

「っ、それは……【神玉】!?!」

彼女が見せてきたのは、両手で覆ってしまえるくらいの水晶だ。それは間違ひなくジェルバが探していた物の一つ【イズリスの神玉】だった。

「里にはもう一つ、命の水さえ作り出すといわれる【神器】がありますよ」

「どうして……」

どうしてそれを教えるのか。探していたことを知っているのなら、それを回収しようとしていることも察しているはず。

ジェルバにはルーフェニアの意図が分からなかった。しかし、彼女は事もなげに言ったのだ。

「私のもとへ『神具』が集まってきたのは、それをいずれ天に返すためだと思っていますから」

予想外の言葉に、声が出なかった。

ここは醜い争いばかり。神が愛する者達は強欲で、なかなか『神具』を手放そうとしない。むしろ、それが尊い神から与えられた物だと知ると、他の『神具』をも手に入れようと自ら戦いを仕掛ける有様である。それが、地上に降りて知った実情だった。

これが本当に神々が助けたかった者達なのだろうか。そんな自問をどれだけ繰り返したことがか。そうして暗い闇に沈んでいたジェルバの心に今、ようやく一筋の光が差し込んだようだった。

「泣かないでください」

知らぬ間に涙が頬を伝っていた。手足だけでなく、頬にも傷があるのだろう。涙が少し沁みる。

神の真意を知ろうともしない愚かな人々。それに追われて逃げる弱い自分が許せなかった。神の力を争いに使う人族が許せなかった。誰も信じられないまま、たった一人でこの地上にいることが嫌になっていた。

けれど、ルーフェニアはそんな醜いものとは無縁だった。その微笑みを浮かべた表情

怒りでおかしくなっていくのを止められない。だからどうか——
「女神よ。どうか……私に死を……」

ジュエルは今日も静かに祈り続ける。完全なる終わりの日を願って。



フリーデル王国。王都から馬車で一時間ほどの場所に、学園街と呼ばれる街がある。様々な学び舎が集まるこの街で、その中心となるのが、貴族の子息子女が通うフェルマー学園だ。この学園の創設は古く、約六百年という長い歴史を持っている。

ヒュースリー伯爵家の令嬢ティアラール・ヒュースリーが通うのも、この学園である。学園が創設された頃、ここにはバトラール王国という国があった。その第四王女として生まれたサティア・ミア・バトラールが彼女の前世だ。

そう、彼女には前世の記憶がある。その理由は『断罪の女神』として信仰を得てしまったことに起因していた。

「ティア、本当に本気なのか？」

不安げに尋ねてくるのは保護者兼護衛のルクス・カランダ。彼はつい数ヶ月前にティ

アが女神サティアの生まれ変わりだと知った。そのせいだけではないが、今日まで貪欲に強さを求めてきた。そして今朝方、ティアが彼にあることを提案したのだ。

「もちろん。もう王都の冒険者ギルドに申請も済ませたからね。今から行ってきて」

現在ティアは学園街にある別邸の門先で、ルクスに冒険者のAランク認定試験を受けさせようと説得を続けていた。

三ヶ月前、妖精王の棲む『赤白の宮殿』で伝説の剣に主人と認められたルクスは、間違いなくAランクに届く実力を持っている。その剣を手にしたという事実だけでも、実力の証明になるのだが、本人が認めようとしなないのだ。

これまでも冒険者ギルドのマスターであるハイエルフのシエリスにたびたび相手をしてもらい、メキメキとその実力を伸ばしてきたルクスだ。希有な剣を手に入れたことを抜きにしても、試験を受ける資格はあった。それを渋っていたのは、ティアや周りの者達を基準にしているせいで、自分の実力を低く見積もっているからだ。

「私の判断が信用できない？」

「そんなことはないっ。……自信がないだけだ」

ティアやシエリスだけでなく、その友人である魔王のカルツォーネ、学園の教師をしている獣人族のサクヤなど、ティアの前世を知る者達の実力は最上位のSランクだ。も

う数百年もの間、そこまでの力をつけた者は人族には存在しない。彼らと手合わせをしたり、一緒にクエストを受けたりしていれば、自信が持てなくなるのも分からなくはない。

「何度も言うけど、シエリスやカル姐を基準にしちゃダメだよ。今のルクスはAランクの実力が充分にあるから。私を信じてよ」

「……分かった……けど、俺が試験を受けてる間はあまり無茶しないでくれよ？ どこかへ行く時はシルかクロノスを連れていってくれ」

「うん。分かっている。心配性だなあ」

「し、仕方ないだろう。今までの行いを思い出してみろっ」

「うくん……昔より大人しいよ？」

「そうか……」

ティアの言う『昔』がサティアとして生きていた時のことだと察したルクスは、肩を落とした。

「いつてらっしゃい。気を付けて」

「ああ……」

見送る気満々のティア。その足下には、ルクスを王都へ送り届ける役目を受けた、真っ

白な子犬マテイがいる。

《主、ここはもつとゲケレイするべきだって、ラキアちゃんが言ってる》

屋敷の窓から顔を覗かせているメイドのラキア。彼女が先ほどから身振り手振りで何かを伝えようとしており、それをマテイが解説してくれた。

「んん？ 激励か……ふむふむ、ほっぺたで良い？」

「え？」

なんのことか分からない様子のルクス。その腕を引っ張ったティアは、彼の右頬に唇を寄せた。

「んっ、いつてらっしゃい」

「っっ……っっ」

《ははっ、ルクス真っ赤。ヘンシンしてない時のマテイと良いシヨウブだよ？》

楽しそうに笑う子犬の正体は、赤い体毛を持つ狼。伝説にして最強の神獣と恐れられるデイストレアの子どもだ。

今は街中だということもあり、その特徴的な体毛を魔術で白く変えている。本来ならば大人の男性の背丈に迫る体高を持つのだが、それも魔術で小さく変えていた。

「マ、マテイっ。行くぞっ。送ってくれるんだろっ」

《は〜い。それじゃあ主、行ってきま〜すっ》
 「寄り道しないでね」

《まかせてっ》

マティが生まれて七年ほど経つが、まだまだ遊びたい盛りのお子様なので注意が必要だ。

こうして、ティアは無事ルクスを送り出すことに成功したのだった。

この世界の休日である休息日まで、まだ三日もある。学園に通う学生であるティアは当然、授業を受けるために登校しなければならない。

「ルクスさん驚いてたよ？　なんで話しておかなかったの？」

ティアの友人で、現在は同居人でもあるアデル・マランドが、隣を歩きながら責めるような目を向ける。朝食の席でルクスに試験を受けてくるようにと半ば命じているところを見ていたからだ。

「決意が固まるのを待ってたら全盛期を過ぎちゃうでしょ。人族の一生は短いんだから」「それは分かるけど……なんか騙してみたいに見えたよ？」

もう認定試験の申し込みもしておいたから、すぐに行っておいでなどと言う姿は、確

かにそう見えなくもないだろう。だが、それもちゃんと想定済みだ。

「そこはほら。ルクスは慣れてるから」

「嫌な慣れもあつたもんだな」

そう同情するのは同じく同居人で、近々親戚にもなる友人のキルシュ・ドーバンだった。

「え？　キルシュもそろそろ慣れてきたでしょ？」

「一体何に慣らそうとしているんだ？　いや、いい。言わなくていいからな！」

怯えたような表情になるキルシュ。ティアとの付き合いも二年目となれば、その破天荒ぶりにも慣れ始めていることだろう。それを指摘してやろうと思っただが、全力で止められてしまった。

「それより明後日の午後、王女に街を案内するって言ってなかったか？」

今年、フェルマー学園の最高学年に、隣国ウイストの第一王女であるヒュリア・ウイストが編入してきた。彼女はこのフリーデル王国の王太子と婚約しており、将来のために少しでもこの国のことを知ろうとしていているようだ。

「うん。改めて学園内を回った後、街を案内することになってる」

入学式と同時に編入してから三ヶ月。学園に慣れることに重点を置いていたヒュリアは、肝心の『この国を知る』ということができていないことを気にしているらしい。そ

れを知った学園長が、それならばとティアに依頼してきたというわけだ。

「それって、護衛としてなのか？」

「一応ね。けどまあ、シルもついてくるんだろうし、王女の護衛は……やっぱり必要な？」

口にしてから考え込む。ティアの影として動いてくれているシルの報告によれば、王女が国から連れてきたのはメイドと従者の二人だけらしい。

王女の護衛としては心許ない気弱な青年が従者。その妹であるメイドは、多少は武術の心得があるようだが、護衛とは呼べない力量だろうという見立てだった。

「なんで疑問形？」

アデルが難しい顔で思案するティアを見て、つられるように眉を寄せた。

「王女なら、普通は騎士の一人でもつけてるもんなんだけどね。危機感がないのか、この国を信用しているのか……」

このフリーデル王国は、人族の国の中では治安が良い方である。たとえメイドが護身術程度しか使えなくても問題ないぐらいには安全だと認識されているだろう。

実際はそう呑気なものではないけれど、現在の学園街は別だ。

「この街の中なら、紅翼の騎士団もいるし、シルキーにも警戒するようにお願いしてあ

るけどね」

この国で今最も有名で実力のある騎士団はと聞かれれば、誰もが『紅翼の騎士団』と答えるだろう。彼らだけではなく、学園の地下に棲む妖精族のシルキーもこの街を守ってくれていた。

「あの騎士さん達、すっごい親切で強いもんね」

「……うん……」

ティアは苦い顔をした。何を隠そう、彼らが現在の姿になれたのは、ティアのおかげだったりする。

当時はこんなことになるとは思ってもみなかった。結果的には良かったのだが、複雑な気分になる理由は、単純に評価できない事情があるからだ。

「さすが、ティアのファンクラブ」

「その言い方やメテ……」

こうして歩いている間も彼らの視線を感じる。ティア達が使う通学路に異常がないかを確認し、陰から見守ってくれていた。明らかに過剰なサービスだ。

「でも、実際に彼らは強いのだろうか？ 国の騎士の平均的な実力は、Cランクの冒険者にも劣ると聞いたが……紅翼の騎士達は総じてBランク相当だというじゃないか」

貴族の次男や三男が騎士の大半を占めている現状、剣などお飾りも良いところだ。もちろん、確かな実力のある者達もいる。けれど、残念ながらそれはほんの一部なのだ。「それってさあ、あの『神の王国』だっけ？ 変な魔獣とかけしかけてくる人達と戦えるの？」

「無理だろうね。今までは運良く先手を取れたけど、不意打ちで攻めてこられたら、国の騎士達だけじゃこの国は守れないよ」

ティアは数年前から『神の王国』と呼ばれる組織と交戦してきた。彼らは『人族至上主義』を宣い、『神具』を使って国を乱そうと暗躍している。

今まではたまたま彼らの行く先々でティア達が撃退してきたが、今の騎士達が彼らを相手にしようとすれば、確実に敗北するだろう。

「あつ、だからルクスさんにAランクの試験を受けるように言ったの？ 冒険者だけで守れるようにとか、ティアなら考えるよね？」

アデルは今の状況からティアの意図を推察しようだ。

「半分正解。ルクス一人がAランクになったくらいでは、底上げにならないからね。けど、さすがに騎士達もAランクの冒険者が自分達より強いってことくらいは分かるでしょ？ だから、もしもの時に騎士達に邪魔されないよう、Aランクっていう看板は背負ってお

いた方がいいんだ」

ティアが危惧しているのは、大規模な攻撃だ。これまではそれほど大事にならなかつたけれど、相手の戦力がどれほどなのか未だに掴みきれない今、戦争というレベルの話になった時に騎士達だけに任せることはできない。

恐らく冒険者も入り乱れての防衛戦になるだろう。その時、平和ボケした騎士達に指揮など執られては堪ったものではない。

何より、紅翼の騎士達は別として、今の騎士達の姿勢にティアは不満があった。早急に、騎士としての正しい姿を取り戻してほしいのだ。

「相変わらず、抜かりないな……お前、それは王や国の重鎮が考えることだぞ」

キルシユの呆れたような声が聞こえるが、ティアは気にしない。仕方がないではないか。ティアには王女であった頃の記憶があるのだ。その頃の感覚はなくならない。

ただ、陰でこんな姑息な裏工作じみたことをするのは初めてだ。上手くやれるか不安ではある。

「もう、ここまでできたらって思うじゃん」

「だったらさあ、騎士の人達にティアが稽古をつければいいんじゃない？ 最近、ギルドでもおじさん達相手にやってるでしょ？」

冒険者ギルドでめばしいクエストがない時は、鬱憤晴らしも兼ねて冒険者達に稽古をつけている。最初は最年少のAランク冒険者であるティアに、僻みから言いがかりをつけてきた者達をノシて遊んでいた。だが、それがいつしか稽古となり、この学園街の冒険者ギルドの名物となっている。

「アデル頭良い！ ダンジョンに挑戦させるつても考えたんだけど、そこまでの力もないんだもん。そうだよね。なら、稽古をつけてちよっと鍛えてやればいいんじゃない？」
ニヤけた笑みを見せるティア。アデルは周りに学園の生徒達がいまいかと心配しつつ、顔をしかめるキルシュに耳打ちする。

「騎士の人達、これから大変そうだね」

「それより、気のせいかな紅翼の騎士達の顔が引きつっているように見えるんだが……」

「あ、ホントだ。っていうか悔しそう？」

ティアの稽古が嫌で引きつっているのではない。自分達以外の騎士達がティアの稽古を受けることに嫉妬しているのだが、そんなことを知るよしもない二人は首を傾げる。

一方のティアは、早くも計画を練っていた。

「そうと決まれば、すぐにでも王様に打診しなきゃね。後で火王に手紙届けてもらおう」
火の精霊王である火王をただの郵便配達に使うのは、世界中でティアだけだろう。



その日の夜。一人の男が、妖精王の住まう『赤白の宮殿』へとやってきた。彼がこのダンジョンへ来るのは約六百年ぶりのことだ。

灰色のローブは薄汚れており、長く風雨に晒されてきたことが分かる。そのローブの下の素肌は、大半が包帯で巻かれて見えなくなっていた。

顔も額の部分は隠され、襟の高い服が口元まで覆っている。目深に被られたフードのせいで、顔を判別することもできなかった。

「……」

無口なその男は、剣を一振り携えていながらも、妖精族の作り出す魔獣を拳一つで消滅させていく。

そうして十階層を突破した彼は、続く十一階層で特別な裏道へと入る。その先には彼が昔、友人から預かった剣が眠っているはずだった。

「……ない……」

辿り着いたそこには、青く輝くその剣がなかった。事情を聞こうと、男は妖精王の部

屋へと向かう。そして聞いたのだ——剣に選ばれし者が現れたことを。

そんな彼に妖精王が提案する。

《久しぶりに来たんだ。子孫の様子を見に行っても罰は当たらんと思うぞ》

このダンジョンからもう少し行けば、亡き妻が遺した学園がある。その学園は今も彼の子孫が守っているはずだ。

会いたい気持ちはある。今の姿ならば、街に入っても問題はないだろう。真の姿がバレることはない。けれど、それよりも剣の行方が気になった。

「……剣の主……見てくる……」

《そうか。確かAランクの試験を受けると言っていたから今頃は……》

「……試験……？ 剣の主は……人族か……」

妖精王の言うことは、男にはよく分からなかった。

《ああ。あの剣にも慣れてきたし、そろそろ試験を受けようって話になったらしい》

世情に疎い彼でも、旅をしてきた中で、人族の実力が昔よりも落ちていることは知っていた。Aランクといえば、現在の人族では最高ランク。異種族の者とも渡り合える実力だ。

「……様子を見る……」

《おう。あの剣の気配は分かるか？ お前なら集中すれば感じ取れるだろうが》

特殊な魔力を帯びた剣だ。一度見れば忘れない。武人として気配を察知する能力は超人的な域に達している。このフリーデル王国ならば二つ三つの領内をまとめて探査できるだろう。

「……あつちか……」

《剣の主^{あつち}に会ったら、その主人にも会えよ。きつとお前にとつても悪い結果にはならない》

「……分かった……それと王……いや、また来る……」

ここへ来たのはただの寄り道のようなもので、彼は人を探していた。その情報があればと一瞬考えたが、今は剣を優先しよう^とと意識を切り替える。

《おう。気を付けてな》

こくりと頷いた後、男はダンジョンを後にしたのだった。



ルクスが試験に出かけて二日目。ティアは授業が終わるとすぐに王都へ向かった。

「フラム、本当に飛ぶの上手になったね」

《じょうず？ うれしい》

フラムはティアと誓約を交わした真つ赤なドラゴンだ。ドラゴンは本来、魔族が保護している。人族の手には余る存在なのだから当然だろう。

そんなドラゴンを『神の王国』が使役しようとした事件があった。彼らはドラゴンを弱らせ、『神具』と呼ばれる魔導具を使って操ろうとしたのである。

結果的に、彼らの作戦は失敗に終わった。不完全な魔導具による弱体化。それは多くのドラゴン達に不調をもたらし、その隙に密漁者達の手で数頭が狩られてしまったのだ。これによって両親を亡くしたフラムは、運良くティアに保護された。その恩を感じてか、自ら誓約を願い出たのである。

出会った時はティアの肩に止まれるくらい小さかったのだが、成体となった今は、大人三人を乗せても飛べるほどの大きさがあった。

「普段から練習したもんね」

《はい》

普段は街中で暮らすために出会った当初と同じ大きさに変化させている。おかげで未だに甘えん坊な性格だった。

「さてと、王城ではもうエル兄様が騎士達の訓練を始めてるはずだけど……」

ティアは昨日のうちに王に手紙を届けてもらっていた。その返信には、冒険者ランクBの第二王子エルヴァストに訓練を始めさせるとあった。

上空から城を見下ろしてみれば、多くの騎士達が集まっているのが見える。

「広い訓練場だね。フラム、あそこに降りようか。ピアンさんが手を振ってる」

訓練場を縦に見ると、王城側となる上半分に騎士達が並んでいる。下半分の中央では近衛騎士のピアンが白い布を両手に持って振っていた。

あれは降参の合図ではなく降下可能の合図である。ただ、さすがにドラゴンが王城に降りると目立つだろう。そう考えて、上空でフラムには小さな姿になってもらう。

ティアは風を纏いながら緩やかに着地し、その肩にフラムが止まった。

「やっほ、ピアンさん。近衛騎士にこんなことさせてゴメンね？」

「思ってもいないことを言うのは、お嬢さんの悪い癖です」

「あはは。バレたか。それで、どうなってるの？」

「あ……それが……」

ピアンが気まずそうに目を逸らす。その先には地面に敷き詰められた騎士達の背中が見えた。

「綺麗に並んで気絶とか笑えるね」

「並ぶところまでは頑張ったんですから、笑わないでやってください……」

そう。上空からは綺麗に並んで立っているように見えたのだが、実は違った。上から見えたのは頭ではなく背中。全員が地面にうつ伏せになっていたので。

「それより、エル兄様がすごく怒ってるように見えるのは気のせい？」

「気のせいではなく、本気で怒っておられます。倒れた騎士達を埋めようとなさいましたからね」

「あらら。あのエル兄様が怒るってことは、相当ダメダメだったってこと？」

近付いてみると、騎士達の服がボロボロになってるのが分かる。ろくに汚したこともないであろうその服が土で汚れていた。

その惨状を作り出したエルヴァストは、現在三人の男に囲まれてふて腐れていた。三人はどうやら騎士団長のようで、ビアンこのえの父で近衛騎士団長のリユークも交ざっている。そのリユーク以外の二人の顔は青ざめており、エルヴァストを説得するのに必死だった。

「殿下がこれほどのお力をお持ちとは知らなかった我々にも非がありますが、これは……」

「我が騎士団の者達が力不足であるというのは分かりましたので……」

しかし、エルヴァストの表情は硬い。

「本当に理解しているのか？ 冒険者をバカにしたあげく、たったこれだけの訓練で音ねを上げるような状態で国を守れると？ お前達は恥ずかしくないのか！」

これに対し、未だ青ざめたままの二人が弁明する。

「お守りすべき殿下の方がお強いという状況は、確かにいただけません。ですが、殿下が強すぎるのです。部下達が冒険者に劣っていると一概いっがいには……」

「そうです。冒険者がというより、殿下がお強いのですよ。それを基準にされても困ります」

エルヴァストがイラッとしたのが目に見えて分かった。彼は二人を睨にらみつけながら告げる。

「まだ分からないのかつ。では、これから王都の冒険者ギルドに行け。そこでBランクの冒険者に勝てたら、後のことはお前達に任せてやる」

「殿下……そのようなこと、できるわけがないでしょう」

「そうです。たとえ冒険者であっても、我々にとつては守るべき国民なのですよ？」
ものは言いようだ。これはダメだとティアも思った。リユークは何かを悟ったように

口を挟まずにいる。恐らく彼もダメだと思っっているのだろう。そこでリユークがティアに気付いた。今まで気付かなかったということは、エルヴァストと他の二人の言い合いに相当ヤキモキしていたのだろう。

リユークはティアのところまで来ると、小さく頭を下げた。もうティアの力量を知っている上、王が信頼している相手ということもあり、対応の仕方としては最上級のものだ。「申し訳ない。さすがに城の警備もあるので第一騎士団と第二騎士団だけを集めたのですが、その……殿下が『冒険者達にも劣る』と話した時点で、騎士達が反発しまして……」

「うん。なんとなく分かった。そうだなあ……王都には今……あつ、良いのがいた」

王都全域の気配を探り、適任者を探し当てたティアはビアンに頼む。

「ビアンさん、精霊達に道案内させるから、三バカを呼んできてもらえる？」

《よんだ？》

《あんない？》

《とつげき？》

「うん。かましてやっても良いからね」

《《《わ〜い》》》

「え？ ちょっと、暴れないようにっ。い、行ってきます」

ビアンは精霊視力を持っているので、普通は見えない精霊達の姿を見ることができ。陽気な精霊達を追って駆け出したビアンを見送り、ティアはエルヴァストに声をかけた。

「エル兄様あ。そろそろ気付いて〜」

「ん？ ティア？ フラムまで……気付かなかった。悪いな」

「ううん。それより今、ビアンさんに三バカを呼んできてもらってるから、その二人をギルドに行かせるのはちょっと待ってね」

「三バカ？ ……何をするんだ？」

エルヴァストは件の二人を避けて、ティアの傍へやってくる。

「実際に冒険者が相手をしないと、納得しないだろうからね。リユークさん、城の警備は私がどうにかしてあげる。だから全員集めちゃって」

「え!? ぜ、全員ですか？」

「うん。近衛も全部。それでも余裕で入るでしょ？ この訓練場の大きさなら」

この際なので、全員に冒険者の実力を教えてやろうと思うのだ。この訓練場は、城の騎士や兵士が全員集まっても訓練できる広さが確保されている。城内にあっても魔術が問題なく使えるようにという理由もあるのだろう。

「それじゃあ、私は王様に会ってくるから、ピアンさんが戻ってくるまでによろしく」
「ええっ!？」

「ついでに、そこで寝てる奴らも戦えるように治療師を呼んできてね」

それだけ言い残すと、ティアは城へと入っていく。後からついてきたエルヴァストが先ほどとは打って変わって笑顔を見せた。

「面白くなりそうだな。あの訓練場は上の階から見えるんだ。貴族達にも見せるか」
「それも良いねえ」

一緒に悪巧みわるたくをするように、エルヴァストは隣に並んでにやりと笑った。

王の執務室。そこにまっすぐ向かったティアとエルヴァストは、扉の前で近衛騎士このえに止められた。

「殿下、その者は……」

「ティアと私が来たど父上に伝えてくれ」

「は、はあ……」

半信半疑な様子で中に伝える騎士。すると、すぐに入るように言われた。

中には王とドーバン侯爵。それと魔術師長専用のローブを着た人物がいた。

「よく来たなティア。エル、訓練はどうだった」

「あれではダメです。一時間ももちませんでした」

「そうか……」

きっぱりと言いつ切ったエルヴァストに、王は困ったたと表情を歪ゆがめる。そして、ティアに申し訳なさそうに告げた。

「聞いての通りだ。かの組織についての報告を聞くに、国の戦力を上げるのは急務だが、騎士達を短期間で役に立つほど育て上げるのは難しいかもしれんな」

『神の王国』の拠点が隣国ウイストにあるということは、既に報告されていた。更に半年と少し前にウイストと同じく隣国であるサガンの『神教会』を取り込んだというのだが、先日、もう一つ新たな報告が上がっていた。

彼らは既にそれらの国の中心部まで食い込んできているというのだ。戦争でも仕掛ける気なのかと思えるほどの動きも見せており、事態は逼迫ひっぴやくしていると思われる。

これを補足するように、ドーバン侯爵が報告した。

「つい二日前、西のイスタル伯爵領からワイバーンの群れが飛び立ったという報告がありました。ウイストに向かって飛ぶワイバーンの群れを確認したのは、これで三件目です」
「奴らは魔獣を操る術あやつを失ったからね。慌てて補充してるんだよ。多分、色々試したけ

どワイバーンでしか成功しなかったんだと思う」

【神具】を失ったことで、魔獣を操れなくなった。そんな中、かつての実験が実を結び、魔獣を操る術を新たに手に入れたのだろう。天才魔工師と呼ばれたジェルバなら不可能ではない。

ただし、その辺にいる魔獣では適応できなかったと思われる。そこそこの強さと思考能力を持つワイバーンだからこそ操れたのだろう。

そこまで考察したところで、今まで口を開かずにはいた魔術師長が尋ねてきた。

「しかし、本当にそのような魔導具が作れるのですか？」

「あいつら実験してたからね。ワイバーンだけじゃなく、ドラゴンでもやってる。その上、ジェルバは研究者だもの。【神具】っていう神の魔導具が近くにあったら、それに類似する物を作ってみようと思うのは当然だよ。何より『神具』は使い手がいなければ使えないんだ。それが使えなくなった時の対応策を考えていないわけがないよ」

「なるほど……」

そこまで話すと、ティアは改めて彼を観察した。

白いものが交ざり始めた黒髪。魔術師とは思えない大柄な体。彼が冒険者だと言われなくても信じるだろう。手の皮膚も硬そうで歴戦の将を思わせる。純粹に杖だけを握ってい

たようには思えない。

そんな視線に気付いたのか、彼は顔を上げてティアに自己紹介をした。

「これは失礼いたしました。魔術師長のチェスカ・ノーバと申します」

「チェスカさん。私は冒険者のティア。よろしくね。ところで、ここに来る前はどこに？」

気になっていることをストレートに聞いてみる。とても誠実な人に見えたので、素直に答えてくれるだろう。実際、そういう人物だったようだ。

「この役職をいただく前は、リザラント公爵領にて騎士団長をしておりました」

「へえ、リザラントの……公爵とは親しい？」

「え、ええ。公爵とは年齢も近く、良くしていただきました」

質問の意図が分からないせいか、チェスカは戸惑った様子を見せる。

「そう……それは使えるね」

「はい？」

ティアの小さな眩きは聞き取れなかったらしい。しかし、その瞳が剣呑に光ったのは気付いたようで、少し体を強ばらせていた。

チェスカがティアの毒牙にかかろうとしていると察したエルヴァストは、ここへ来た目的を思い出させるようにティアに声をかける。

「それでティア。これからすることを父上に報告するんじゃないのか？」

「そうだった。これから三バカ達に騎士達を叩かせるから、その間の警備は私に任せて」

「……ん？ 悪い。よく理解できなかったのだが」

王が怪訝な顔で二度聞きする。

「だからね。ドーバン侯爵の時にやったじゃん。騎士瞬殺☆ それを今からやるけど、城の警備は私がするから心配しないでねってこと」

「……エル、解説を頼む」

「はい。父上」

エルヴァストが真面目に応え、王の前に立って説明を始めた。その間、ティアは近くにあった椅子に腰掛けてフラムとおやつを食べながら待つ。

お茶まで淹れ出した頃、ようやく理解した一同は、顔色を悪くしながらティアに目を向けた。

「うん？ お話終わった？」

「あ、ああ……コリアート、城の中にいる貴族達をそれとなく集めてくれ」

王が頭を抱えながらドーバン侯爵に指示を出す。すると侯爵はすぐに部屋を出ていった。

「それでティア、すぐに始めるのか？」

「もうすぐ三バカも来るからね。問題は、騎士達がどれだけ回復してるかだけど」

「だが、その三バカ？ の相手は誰にさせるのだ？ 相手によっては騎士達を納得させることは難しいだろう。中途半端な騎士を選べば、その騎士が負けたとしても、自分よりは弱いからと難癖をつける者がいるやもしれん」

さすがは王だ。その可能性も間違いなくあるだろう。しかし、それは想定済みだ。

「分かっている。だから、三バカには全員を相手にしてもらおうんだよ」

「……無理ではないか？ 騎士達は軽く三百を超えるのだぞ？」

「問題ないって。まあ、全員一度にはしないよ？ それだけの人数が三人に殺到したら、見る方も何がなんだか分からないだろうし。だから、一つの団ごとにね」

「いや、それでも無理があるのでは？」

王が無茶だと思ふのも当然だ。けれど、ティアの知る三バカ達ならば、たとえ百人が相手でも勝てると思うのだ。

ここふた月ほど、彼らは妖精王のダンジョンで修業していた。三人で二十階層まで行けるほどの実力をつけていたのだ。パーティランクは既にAランク。現在、あの少人数では最強のパーティである。その名も『三バカ』。

「三人ともBランクの冒険者だし、経験はそれなりに積んでる。何より、体力も度胸もあるから」

「そなたがそこまで言うのなら……」

「うん。大丈夫だよ。私が相手でも笑って立ち向かってくるくらい根性あるし」

「なるほど。彼らの心配はいらないようだな。むしろ、騎士達が心配になった」

今まで不安そうだった王が腑に落ちたという顔をして、ついでにチェスカに指示を出す。

「治療師を全員集めてくれ。適性がある者も全員だ」

「はあ……承知いたしました」

チェスカも部屋を出ていき、王の前に残ったのはティアとエルヴァストだけだ。

「死者は出してくれるなよ？」

「そこは頑張れとしか。まあ、三バカも手加減はするでしょう。私情でちよつと力入りそうだけど、そこはねえ」

三バカ達は騎士になりたくてもなれなかった者達だ。きつと、相手にする騎士の中には騎士学校の同期もいるだろう。そいつらが腑抜けでないことを祈る。

「それじゃあ、私は見物がてら警備の方に集中するから、エル兄様が監督ね」

「分かった」

「私も行こう。そなたの傍にいた方が安全だろうしな」

これでは仕事にならないと諦めた王は、ティアと共に見物に回ることにしたようだ。

やがて始まったのは、三バカによる一方的な蹂躪だった。

「剣の握りが甘いぞ」

「気合いが足りない。踏み込みも甘い」

「足腰弱っ。これじゃ、おじいちゃんの方がよっぽどしっかりしてるよ？」

そうやって口で心を折るのも忘れない。

「なんでっ……なんで出来損ないのお前らなんかにつ」

「騎士にもなれないお前らがなんでこんなに強いんだっ」

案の定、同期がいたらしい。彼らは悔しそうに地面に転がされていた。

そんな情景を見下ろすティア達。臨場感を出すためチェスカにお願いした拡声の魔術により、離れていても声が聞こえている。隣では王が騎士達を憐れむような表情で見守っていた。

「これは……しばらく使い物にならない……」

心も剣も折られた騎士達がすぐに立ち直れるとは思えなかったらしい。

「あははっ。大丈夫だって。この後は私が暴れるから」

「……ん？ すまない。今なんと？」

今日はよく二度聞きされるなど、ティアは首を傾げながらも一度言う。

「だから、この後、私が直々に稽古つけるから、心折れてる暇なんてないよ？」

「……リユーク、コリアート。警備の見直しを頼む。紅翼の騎士団を呼んでおいてくれ。早急にな。では、私は執務に戻る……いや、少し奥で休憩してくるからな」

現実逃避するように王が奥へ消えていく。

「シル、王様をお願い」

「はっ」

いつの間にかやってきていたシルに、ティアは王の護衛を頼んだ。結果によつて害意ある者が立ち入れないようにしてあるとはいえ、人と接触しないとは限らない。近衛騎士もいない今、護衛の一人くらいつけなくては危なっかしい。シルならば万事上手くやるとティアは信じていた。

「さてと、もうそろそろ終わるかな」

そうして悪魔が立ち上がる。騎士達はこの日からティアを教官と呼んで畏れ、敬うよ

うになるのだった。



その頃、王都の冒険者ギルドでは、ザランがギルドマスターと面会していた。

「待たせて悪かったねえ」

そう言つて笑顔を見せるのは、人族のギルドマスターの中で一番人気の老人だ。

「いえ。お忙しいとは分かつておりますので」

「それでも、ジルバール殿の手紙を持ってきてくれたんだからねえ。優先すべきでしょう」
ヒュースリー伯爵領の領都、サルバの冒険者であるザラン。ティアに『サラちゃん』と呼ばれて慕われる彼は、サルバと学園街を幾度となく往復し、時に王都まで足を伸ばすというのがここ一年ほど続いている。

時にティアに振り回され、時にサルバのギルドマスターであるジルバールにこき使われて過ごした日々。それでも相手にするのがティアの関係者ばかりとなれば、平凡な冒険者のままではいられない。

ザランは数ヶ月前、ティアとジルバールの勧めでAランクの認定試験を受け、見事合

格を果たしていた。ちようど、ティア達が妖精王と再会を果たした頃だ。

数年前のザランからは考えられないほどの進歩であり、ティアの傍にいることは、それだけ大変なことだった。

「ありがとうございます。預かった手紙はこちらです」

「うん……ふむふむ……」

手紙に目を通したギルドマスターは、白い顎髭を撫でながらザランを見る。

「ザラン君。一つ、クエストを頼めるかな？」

「クエスト……ご指名ですか？」

「そう。ここ最近、ワイバーンの群れが不可解な移動をしているという報告が上がってきているんだ。どうも何かに操られているらしくてねえ」

ザランもその噂は聞いていた。ウイストの方へ群れで飛んでいくのだと。近いうちに調査のためのクエストが出されるのではないかと予想していた。それが今、ギルドマスターの指名でザランに出されようとしている。

未だに実感が湧かないが、ザランはAランクなのだ。ワイバーンの群れの中へ入っていくような危険なクエストを任せられても不思議ではない。

しかし、不意に思い出して気になることがあった。

「それは……もしかして、ティアが関係しているやつですか？」

「だろうねえ。ジルバール殿がこれだけ本腰を入れてるってことは、ティアちゃんが追ってる組織絡みだと思うよ」

「そうですね……」

ザランは思案するように椅子に深く体を沈める。

いつの頃からだろうか。自分が蚊帳の外にいと気付いたのは。

もちろん、何かにつけてジルバールにティアとの間を行き来させられ、その甲斐あって色々情報も得られた。ティアが何と戦っているのか、その相手が何者なのかも独自に調べている。王都とサルバを行き来していれば、多くの情報が自然と耳に入ってくるのだ。

けれど、一度としてティアから協力を頼まれたことはない。もちろん、戦闘力で劣る自分ではティアの役に立てないと分かっている。けれど、頼ってくれてもいいではないかと思うのだ。

そんな思考が表情に出ていたのだろうか。老人ながら可愛らしいと人気のギルドマスターが目の前で笑っていた。

「ふふっ。君も若いねえ」

「いや、これでも三十半ばなんですけど……」

「あははっ。大丈夫。知ってるよ。童顔ではないもんねえ。見た目じゃなくて、中身の話」

「はあ……」

もしかして、自分はバカにされているのだろうか。そんな思いも表情に出ていたのかもしれない。

「羨ましいんだよ。この歳になると、君みたいなのはキラキラして見えるんだ。女の子のことで悩むなんて素敵じゃないの」

「っ、えっ、いや、ティアは確かに女の子だけどっ。何か勘違いしてませんかっ？」

ザランは慌てて弁明するが、相手は余裕の表情だ。

「勘違いなんかじゃないよ。君のソレは間違はなく男女のソレだよ。頼りたいんでしょ？ 傍にいたいんでしょ？」

「っ!？」

言われて初めて気付いた。ティアの傍にいられないことが、力になれないことが嫌なのだと。

面倒だと思いつつも学園街とサルバを行き来していたのは自分だ。届け物を頼まれてサルバを出る時、早く届けたいではなく、早く学園街に着きたいと思った。滞在できる

時間も計算して、おっかないメイドのラキアに文句を言われながらも、ヒュースリー伯爵家の別邸に泊まった。

数年前までは、ギルドに行けばティアに会えた。けれど、ティアがサルバを離れた今はこちらから会いに行くしかない。そうやって、ティアに協力してくれと言われるのを待っていたのだ。

ザランは自分の気持ちをゆつくりと言葉にしていく。

「ティアを見ると、もう少しこちらを顧みてほしいと思うんです。ティアは案外真面目で……色んなことを考えすぎてる。まあその、そこが良いと思うんですけど……」

彼は知らない。この独白は、魂の奥底に刻まれた思いと同じ。かつて感じた強い後悔の念が、その言葉に現れていた。

「自分も関わっていたと思うんです。置いていかれるのは……嫌だ」

現在の思いと、魂に焼き付いた思いが重なり、ザランを突き動かそうとしていた。

目の前のマスターは微笑みを浮かべて耳を傾けている。しかし、重要なことも忘れてはいない。

「気付いて良かったねえ。危うくジルバル殿に刺されるところだったよ？」

「じよっ、冗談に聞こえねえ……」

「うん。間違いなく未来予想だね」

「断言された!？」

確かにそうだ。無自覚のままティアの傍そばにいたら、間違いなくあの嫉妬しじとに狂ったエルフ様が後ろから遠慮なく刺してきただろう。

「あつちに戻る前に、ちゃんと気持ちに整理をつけるようにね」

「えっ、もしかして、そこまで考えてクエストを……」

時間を稼ぐ意味で指名してくれたのではと、ザランは目を見開く。だが、目の前の彼はあっさり裏切ってくれた。

「まさか。ちよつと年長者っぽくてかっこよかったでしょ? もう、最近可愛いばかり言われるんだもん。僕もう九十五だよ? 威厳いげんとか欲しいじゃん」

「……ソレ言わなかつたら尊敬してましたよ……」

「えっ、失敗したっ? 残念……」

シユンとした表情が可愛いとは口にはしないザランだ。

「あの、それで、クエストはそのワイバーンの調査で良いんですか?」

「うん。これ以上持っていられないようにしたいんだ。できれば彼らの動きを阻止するつてもクエストに加えるよ。次に狙われそうなどころのリストと、アドバイザーを用意

してるから、下でちよつと待ってて。速攻で正式なクエストとして発行するからね」

「分かりました」

あわよくば犯人を捕まえようと決意する。ワイバーンが突然おかしな動きをするわけがないのだ。確実に工作員はいる。それを捕らえられれば、ティアの役に立つかもしれない。

部屋を後にしようと立ち上がるザランだったが、すぐにマスターに呼び止められた。

「あつ、もう一つアドバイス」

「なんででしょう」

向けられた笑顔に、少し嫌な予感があった。

「遺書は用意しておいた方がいいよ? 何事も備えは大事だからね」

「それ、うちのマスター対策っすか……」

「うん。ワイバーンよりおっかないもんね」

「ちよつとは援護してくれたり……」

「やだよ。僕まだ死にたくないもん」

頬を膨ふくらませたマスターに興味返しを思いつく。もう何年もティアにからかわれ続けしてきたのだ。反撃の機会は逃のがさない。

「……そのふくれっ面、可愛いっすね」
 「うわあんっ。可愛いって言われたあっ」

その反応に満足しながら、ザランは部屋を後にしたのだった。



月明かりが美しく大地を照らす頃。ティアは王都から少々北に外れた場所に來ていた。高い塀で囲まれたそこは、夜でも門の前に見張りの兵が立っている。

ここはフリーデル王国の王家の墓だ。

見張りの兵であつても中に入ることはできず、塀を跳び越えて入り込めば邪魔者はいなかった。

途中までマティに乗ってきたのだが、近くの森で別れた。久しぶりの夜の散歩だと言つてはしゃいでいたが、火王を傍に置いてきたので羽目を外しすぎないと信じた。

ゆったりと歩いた先、中央から少し外れた場所に大木がある。その前にあるのは、『サティア』の名が彫られた墓石。そして、その横にかつての婚約者である、ラピスタの国王『セランディーオ』の墓石が並んでいた。

「セリ様……」

彼に似た王と会つていたからだろうか。ずっと足を向けることができなかつたこの場所へ来ようと思つたのだ。

その時、墓石の前に立つティアの後ろに、羽音を響かせながら舞い降りた者がいた。

「ティア……どうしたの？」

彼はカランタ。金の髪に青い瞳、真っ白な翼を持つ天使だ。その前世はサティアの父で、バトラール王国の最後の王であるサティルだった。

ただし、そのことに気付いたことは本人にはまだ内緒にしている。今の彼は十八歳くらい姿をしているので、ティアの知る父とは似ても似つかなかった。

ティアは振り返ることなく答える。

「不思議だったんだ。なんで王都の場所が、昔のバトラールの王都があつた場所でも、ラピスタの王都があつた場所でもないのかなって」

「……うん……」

ラピスタはここよりも北にあつた。街道や国境への距離なんかを考えれば、この辺りに王都を持つてくるのが自然だろう。そうしなかつた理由が、ティアにもようやく分かつた。